
ユーカイロジック

庄直ネムイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユーカイロジック

【Nコード】

N2147C

【作者名】

庄直ネムイ

【あらすじ】

平和に暮らす二人の男女の過去の話。突然の事件により普通の生活から遠ざかる『ゆうくん』。ある誘拐事件に関わる『香』。二人は出会い。二人は共に進む…家族を捜す為に…

プロローグ（前書き）

短編小説の作りなのですが、連載と言うか小出しな感じにしました。
一話一話が短いのでサクッと読んでください。
自身二作目です。
よろしく願います。

プロローグ

嘘つき、弱虫、偽善者。

「僕」はそう呼ばれている。

まったく持つて自覚はないが、そのような傾向にあるようだ。

僕よりも正しい人間になりたければ

「嘘つき」と呼べばいい。

僕よりも強者になりたいなら

「弱虫」と呼べばいい。

僕よりも良い人間に見られたいならなら

「偽善者」と呼べばいい。

どう呼んでもらっても構わない。

自覚、ないから。

ただ単に認めなく無いのだけなのかもしれないが、長い人生からすれば大したことはない訳で、無駄に言い争う気もまったく無いし。

時間がたてばすぐにいなくなる。

他人なんてそんなものだ。

僕を下位に置くことで幸せな気分になれるなら、優れている人間だと錯覚したいなら。

どーぞお構い無く。

どーぞ下位に置いてください。

僕は他人に

「嘘」をつかない。

僕は

「弱虫」じゃない。

僕は心のそこから他人に

「親切」にする。

だけど他人は僕を嫌いだ。

君は僕を友達にしてくれるかい？

一緒に居てくれかい？

信用してくれるかい？

でもね、止めたほうがいい。

僕は

どうしょうもない。

「嘘つき」

だからね——。

第1話の1

「暇だねーゆーくん…」

「ああ、暇だな……いいんじゃない。平和で」

雑に積まれた雑誌やゴミ袋。窓は一つ、カーテンは無い。中央にテーブルとイスが置いてあるが、それ以外特に目立ったものは無い。殺風景な八畳の空間。

ここが僕の部屋だ。

で、僕を呼んだ今にも眠りそうな面をし、
今にも倒れそうな体をし、

そして今、イスに座って足をブラブラさせているのが、

刈谷 かりや 香 かある

背中まで伸びたストレートの髪が印象的な女の子。

顔は同年代とは見えないほど童顔だが体の方かというと…
顔の真逆で目のやり場に困るぐらいだ。

僕のことをゆーくんと呼ぶが僕の名前にはゆーなんて付かないのに
なぜか、呼びたがる。辞めろと言うと拗ねるから今はしかたなしに
返事をしている。

背中にある大きな切り傷が。

これは、たぶん僕しか知らないだろうけど。

本人も忘れているだろう。

こいつとは友達と言うほど仲が良い訳ではないが、知り合いと言う
には違いすぎる。

彼女…全く違う。

昔、同じ時間を二年も共有した仲。

今現在、同居している仲。

友達とか親友とかでは言い表わせないがあえて言うならば、

「共害者」

つてなるのかな？

僕達はある事件をきっかけに知り合い、

二年間も一緒に生活し

また今も一緒に生活している。

お互い無くてはならない存在。文字どおり存在のみが無くてはならないのである。

事件は今から十年前、僕が小学六年生の頃

桜が満開を向える時期に突然起こった。

第1話の2

僕は父と母と妹で週末、遊園地に出掛けた。三歳下の妹のミカンが父にワガママを言い続けようやく叶った家族旅行。

父は小さいながらも建設会社の社長という立場もあって、週末でも仕事ばかり。中々家族で旅行という行事にありつけない家族だが、さすがに妹のしつこさには父も参ったらしい。

父がおれた。

かといって僕が楽しみだったかと言えば別の話で正直どうでもよかった。

たしかに久しぶりというのもあってか、少々浮かれ気味だったけど、どうにも人ごみには慣れない。

大衆に巻き込まれた時の自分の存在の小ささ。騒音、雑音。すれ違いに僕を見下げる他人たち。早く大人になりたいと思う時でもあった。

とまあ、そんな事を言いつつも僕も一緒に来て楽しんでいるのだからまだまだ子供でもいいとも思ってた事もする。

それに比べれば、いや比べるのが間違っているのだろうが父は疲れたような表情を浮かべていた。折角の休みにこんな場所にいたらそりゃ疲れるし、今後の仕事の事なんかを考えて憂鬱にでもなってるんだろぐらいにしか思っていなかった。

いや、そんな事すらも思ってもいなかったかもしれない。

遊園地を隈無くって程でも無いが、ほどほど歩き回って、乗りまくって、食べまくって、遊びまくった。

そろそろ閉園時間を向えようとする頃には妹はすでに母親の背中にしがみついていた。と言うより疲れはてて寝てしまっようだ。

口をむにやむにやさせながら呟いている。さっき食べたクレープの夢でも見ているのだろうか――。

「フニユ…ミカンのクレープウウ……」

そのようだった。

「

ん？あれ？何か聞こえたような気がしたけど——妹は寝てるし、寝言にしては——気のせいかな？

キヨロキヨロと辺りを見渡すが誰もいない。

少し後ろを歩いてる父親、僕の横で妹をおぶってる母以外は。」

……か？」

今度こそ聞こえた。後ろから、父の方から、父から聞こえた。

僕は歩く足を止め父の方に体を向けた。

父は下を向き、自分の足元を見るよう、ぶつぶつと呟きながら歩いていった。そして歩いてきた。

「あ、危ないよ父さん！ぶつかると寸前じゃないか。てか、ぶつかってるよ……」

父はすまんすまんと適当に謝り、急に止まると僕のせいにしてきた。その顔は疲れ切っていた。さすがに歳なのだろうか？疲れ切っていた——。と、この時は思っていた。

第1話の3

「お化け屋敷に——行かない…か？」

父は突然そう言った。閉園間際、しかも父の方から。今日一回だつて自分から言いだすこと無く、僕か妹の行きたいところばかり行っていたのに。

「お化け屋敷…」

僕が考える暇もなく、父は歩いて行ってしまった。母に言わせれば

「あの人気まぐれだから」なんて微笑んでいたが、僕にしてみれば意外や意外。そんな父は始めて見た。お化け屋敷の前につき母が「私たちはあつちのベンチに座ってるから」と言い背中に妹を背負ったまま行ってしまった。

ベンチなんてあつたかな？

「じゃ入るか。」父は僕の腕を引きお化け屋敷に入って行つた。

正直お化け屋敷は苦手だ。だから避けていたのもある。それは妹も同じだと思う。だからと言ってお化けが怖い訳ではない。暗闇が怖いのだ。

はつきり言つてここのお化け屋敷はあんな子供騙しのお化けでは子供も騙せないほどのクオリティだし。

当然わかつていて入ったのだからまったく怖くない。むしろ、虚しい感じもする。

しばらく奥に進むと父が話し掛けてきた。

「ゆーくんは怖くないのかな？ パパはこついの嫌いだな…」

がっちり僕の腕をつかんだ父が軽くそう言った。

「お父さん痛いよ！いくら怖いからってつかみすぎ！僕は怖くないよ！お父さん臆病だね。」ははつと軽い笑いを吐き父は腕をはなした。

「ゆーくん怖くないのか？じゃあ——これならば？」

突き飛ばされた。

僕は後方に突き飛ばされた。

僕は思い切り後方に突き飛ばされた。

ドンツと何かにぶつかるかき重い音が辺りに響く。

「いたたたっ…父さん何すんだよ！」

僕は倒れたまま怒りの混じった声で前方にいる父を怒鳴り付けた。

父は

目の前に

いた。

いつの間にか僕の目の前で父が立っている。右手にキラリと何かが反射した。

「ごめんな…ゆうくん…でもわかって——くれっ！」

父は倒れてる僕に容赦無く右手を振り下ろした。

口では謝ってはいるが、それは容赦ない。ためらいのない。躊躇も感じられないスピードで僕に襲い掛かった。

僕は倒れて態勢の整わないまま、そのまま右に倒れこみ紙一重で回避。

ドスツという鈍い音と共に父の右手はお化け屋敷の壁に刺さった。

刺さった先を見つめる僕。そう、刺さったのだ。

キラリと反射したもの。

それはナイフ——いや、それは包丁だった。

第1話の4

父は俯き加減だった顔を上げ、肩で笑い、別人のような口調で話始めた。

「ここら、逃げたらダメだろう？ちゃんと刺されないと死ねないよお？」

僕は必死で態勢を立て直し、順路を逆走した。出口のが近いのだが、そちら側には父が――いや、あの狂った殺人鬼が立っていたからだ。父も刺さった包丁を抜き僕を追い掛けてきた。

「ここら、待ちなさい。ミカンは母さんに殺されてるだろうから、ゆーくん。死なないと一人になっちゃうよお？」

ショックだった。妹は母さんに。しかし、今は逃げるのが最優先。死にたくない。父が嘘をついている可能性も無きにしろ有らず。

僕は逃げた。全力で逃げた。他の客がいないので助けを呼ぶこともできない。入り口まで逃げ切れば、受付のお姉さんぐらいはいるだろう。

そう思っていた。そう考えていた。そうなるだろうと思っていた。入り口の光が見えたから。逃げ切れる、生き残れる希望の光が見えたから…

しかし、そんなに甘くはなかった。

後ろから追いつけてたはずの父が入り口方向から歩いてきた。もちろん、右手には包丁を持って。

カツカツと足音をたて近づいてくる。

「なんで…どうやって…」

僕は混乱しその場に立ち尽くしてしまった。

一歩も歩く事ができなかった。全力疾走の反動、後ろから前に出てきた父、絶望…

僕はそのまま倒れこんだ。

「もうダメだ…」父は僕の目の前で立ち止まり見下ろしている。
僕は父を見上げている。

「なんで…なんでだよ父さん…なんでこんな事するんだ…よ」
今にも泣きそうな弱々しい声で目の前の父さんに話し掛ける。
一瞬の間が空き、そして父はそれに答えた。

「何だあ？ ゆーくん。知らないのか？」

そう言つて父は黙つた。その間は一瞬とも永遠とも思つほどに僕には耐え難い物だった。

「お前は俺の息子じゃないからだあ！ あのだ、あの忌々しい奴の子供だからだよ！」

そう言つと同時に右手を振り上げ、そして振り下ろした。

僕にはそれを理解する時間も無く、理解するだけの頭もない。ただ、ただ振り下ろされる包丁を見ていることしか出来なかった。

何も考えられない。考えない。感じない。感じられない。分からない。分からない。分かるうとしない。死ぬ。殺される。父に。他人の父に。

僕の最後。

僕に送る言葉。

サヨウナラ…ボク

第2話の1

暗い暗い暗闇の中に僕はいる。辺りを見回しても何もなく、地面もない。まるで宇宙空間に放り出されたような感覚だ。もちろんそんな所に行ったことないが。

僕はその空間ですべてを流れにまかせ墜ちて行く。たぶんこれが『死』と言うことなんだろう。感覚も感触も、ましてや視覚や聴覚も失ったかのように何も感じない、何も見えない、何も聞こえない。

父に襲われて死んでしまったのだろう。死ぬとはこういう事なんだろう。スーと墜ちて行くような、引き戻されるような……

「気持ちがいい……」

しかしバチン！という音が響き渡り引き戻された。

「コラッ！起きろガキ！いつまでもお前に付き合ってられねーんだよ！」

気付くと僕はベッドの上に寝せられていた。どうやら寝ていた、いや状況からみれば気絶していたのだろう。

僕は目を開け辺りを見回すと、僕を囲むように三人の人が立っていた。一人は白衣を着ているじいさん。もう一人も白衣を着ているが女性だ。と言うことはここは病院か？もう一人は――

「おお！ようやく目を覚ましたか。まったく何時間、俺様の貴重な時間を奪ってくれちゃう訳ですかあ？もう平気だろ？行くぞ！」

僕を無理矢理引き起こそうとするその女性は、整った顔立ち、長身で威圧的。後ろで一つにまとめた長い黒髪。真っ黒な革のジャケットにズボン。惜し気もなく開いた胸元からはドクロのネックレスがこちらを伺っていた。

「痛っ！何するんですか？！あなたは誰ですか？！ここは何処ですか？！どうしてこんな所にいるんですか？！」

僕はありっただけ、思い付く限りの質問をし、その強行の手を振り払った。

「あ？何も覚えてないのか？俺の顔も分らないと？汲^く凧^{なび}様が分からないと？」

「

僕は正直に頷いた。

「あちゃあーそうかそうか、仕方ねえな。取りあえず外行くぞ？ついてきな。」彼女は僕を呼ぶような仕草をして部屋から出ていってしまった。僕も起き上がり追い掛けようとする白衣の女性に止められた。

「絶対安静です！」

「かまわねーよ！早く来い！」

遠くから叫ぶような怒声がした。

「そういう…事なんで…」

僕は本能的にあの人には逆らわないほうが良いと思い、白衣の女性が止めるのを振り払い黒い服で身を纏った、汲^く凧^{なび}と言う女性の後を追いつけた。

第2話の2

僕は言われるがままに病室を後にし追い掛けた。階段を下り出入口付近まで行くとさっきの女性がバイクに股がっっていた。

あの格好から予想はできたが、さすがに体のバランス的にもでか過ぎるバイクである。

僕が立ち止まり呆気にとられていると、向こうから手招きをして僕を呼んでいた。急いで駆け寄った。

「自己紹介がまだだったな？俺の名前は

癒梨いえり 汲風くふ

25歳独身、よろしく！」腕をビツと振り、親指を立て、軽くウ

ィンクをして親近感を持たせたいらしいが、僕は

「は、はあ…」と気のない返事しか返せなかった。

「取りあえず後ろに乗れ。話は帰ってから聞かせてやるよ。親父さんの事とかな…」

親父…父親…。僕を殺そうとした父親……

うつむき、少し考え中の僕にヘルメットを渡し、軽快にアクセルを吹かしている。その音は近所迷惑、騒音公害とでも言おうか、ハッキリ言って騒がしい。

僕は行くべきか、行かないべきか、ハッキリした回答を出せないままだったが、突き出されたヘルメットをしっかりと被り、バイクの後に乗り込み、掴まるところを探してしたら

「僕う？恥ずかしがらずに俺に掴まりな。お姉さんは軟らかいぞお」と謎の台詞を吐いたので素直に掴まる事にした。

「ん、——軟らかい…」

「よし！しっかり掴まっとけよ！——じゃいくぞ！」

強烈なホイールスピンをかまし、バイクは走りだした。こんな狭い道でどんだけ飛ばすんだと言わんばかりのスピードで走りだした。明らかに無謀と言ってもいいぐらいのスピードで走りだした。

――僕は落ちた。

バイクは停止しヘルメットのシールドを開け汲皿さんは笑っていた。

「あははははっ、だから言ったじゃねえか！すっかり掴まってるよって？死んじやうぞ？それとも自殺志願者なのか？あははっ！」

僕は服の汚れを払い、怒りの表情を見せながら無言でバイクの後に戻り、力一杯、力の限り抱き締めた。

「ぐええ！痛い！痛い！ごめんごめん、今度は安全運転で行くから！ごめんな！」

その後は安全運転とはいいがたいが僕を気にしてくれているのは分かるぐらいのスピードで路地を抜け、大通りをひた走り、また路地を走り、僕の知らない場所をひたすら走り、そしていかにも怪しい雰囲気の雑居ビルの前で停止した。「ふう、到着う。このビルの三階が俺の事務所だから先に上がってくれ！バイク置いたらすぐ行くよ」

目的地に到着したらしい。ビルを見上げる僕。とりあえず、こんな所で見上げていても仕方ないので、言われた通り三階に行くことにした。

このビルは七階建てのビルなのだが、エレベーターが設置されていなかった。その為に三階は階段。強制労働を強いられる事となった。

『癒梨探偵事務所』

三階までたどり着き、ドアのガラスに書かれていた文字だ。

「探偵………」

僕は探偵と言うものをよくは知らないが、何だかカッコいい感じはする。

ドアノブに手をかけ左に半回転。そして軽く、恐る恐る押してみた。

「開かない…」

何度もガチャガチャやっても開かない。

「ふぁーい。今開けまーす！」

中からやる気の感じられない声がし、ドアが開いた。と同時に吹き飛んだ。

——引き戸だったようだ。

「大丈夫ですかぁ？ すいませえんん…怪我は無いですかぁあ？」

「大丈夫です。」と適当にあしらい、顔を上げると目の前にいたのは汲風さんだった。

第2話の3

「汲風…さん？」

僕に先に行つてゐるなんて言いながら僕より早く部屋にいるじゃないか。いや、待ておかしい。どう考えても僕より早くつく訳が無い。それに服も全くもって違う。

先程のハードな革スタイルから一転。目の前の汲風さんは黒のワンピースのスカートに白いエプロン。肩には白いフリル、とどめに白いカチューシャ。これは…これは！どう見てもヴィクトリア調のメイド服！

着替える時間など有るはずが無い。じゃ目の前に立っている汲風さんは誰だ？

「あ、あの…お姉ちゃんに用事ですかああ？お姉ちゃんなら今出掛けて外出してますがああ？」

お姉ちゃん…って事は妹のようだ。しかし頭は良くないだろう。

『出掛けて外出』日本語おかしいよ。

「あ、汲風さんに言われて来たんですよ。もうすぐ来ると思いますが…」

「あらあ？そうなんですかあ？それじゃあ、部屋に入って行きますかあ？」

「そ、そのつもりなんですが…」

この人とは話が噛み合わないだろうと直観的に思った。

部屋の中はイメージ通りと言うか、よく有りそうな事務所だった。観葉植物が数鉢置いてあり、中々広い室内の中央にはガラスのテーブル。その両側にはソファが押してある。道路側のガラス窓の下には木製の机に高級そうなイスが置いてある。左右の壁には扉が一つづつあるので部屋は最低でももう二部屋ありそうだ。

「じゃ、そのソファで座っててねえ？君の話だとすぐ来るみたいだからあ紅茶でも入れてくるわねえ。」

最後に「早く来てくれるといいわねええ？」と言い残し僕の後ろのドアへと行ってしまった。

僕は取り敢えずソファ―に座り待つことにした。

――こない。

あれから一時間ぐらいいは経ったらだろうか。汲風さんどころか紅茶を煎れに行った妹メイドさんすら来やしない。

「放置……ですか……」

ちよつと寂しくなってきた。かと言って、どこにも行く当ては無いし、ここがどこだかも分からない。

――待つしかない。

それからさらに一時間。時間は分からないので大体。

ドドドドオ……パンツ！

突然の轟音と共に扉が開き、そちらに振り返ると息を切らし扉に寄りかかった汲風さんの姿がそこにはあった。

「はあはあ……すま……ん少年……んん、はあはあ……はあ……おい！水くれ！」

少し間が空き扉の奥から返答があった。

「ふああい。おかえりなさい、お姉えさん。今、紅茶をお出ししますねええ」

汲風さんは僕の対面のソファ―に倒れるように座り込み、僕の方を伺っていた。息は整ったようだ。

「いやあ、待たせちまったな！怒んなよ？怒らないで聞けよな？いやー車庫にバイクを止めたらよ？少し、ほんの少しなんだが汚れが気になってな――洗車してた！」

「……………」

そんな理由で二時間近くも待たされたのか。怒るなど言うほうが無理である。僕は苛立ちを隠せなかった。

「だ・か・ら！怒んなよって言ったじゃねえか？カルシウム足りて

るか？——炒瑛菜！紅茶はまだか！客人が待ちくたびれてるぞ！」
「ふ、ふああい！もうちょつとおー少しだけまってくださああい！」
炒瑛菜？メイドの妹さんの名前か？それよりも僕は何時間たてば紅茶に有り付けるのだろうか。特別飲みたいわけではないが、ちょつとだけ気になった。

「炒瑛菜には会ったろ？俺の妹だ！——んな、一卵性双生児ってやつ？簡単に言うると双子だな。俺に似て可愛いだろ？」

どうりで似てる訳だ。服と髪型が同じなら区別するのは無理だろう。

ちなみに双子の姉妹の定義で言うと、先に生まれた方が妹だったような……って事は、後に生まれた姉である汲風さんが炒瑛菜に似てるんじゃないか？ま、この辺は微妙なので触れないで置いておこう。僕が知りたいことは決まっている。

「汲風さん。イライラついでに単刀直入に聞きます。貴女は何者ですか？僕をどうする気ですか？父は……僕と父はどうなったんですか？」

すると汲風さんはゆっくりと両手を組み、テーブルに肘をつけ、軽く口元を吊り上げ微笑んだ。

「ん、ま、そうだな。お前が知りたいことなんて分かってるよ。むしろ、お前に教える為に連れてきたんだからな。——まずはお前と父親の悶着があった、あの日の事から話してやるか……」

そう言い汲風さんはゆっくりと語り始めた——

第2話の4

「まず…」

「紅茶お持ちしましたあゝ」

バッドタイミング。

炒瑛菜さんが紅茶を差出し何やらニコニコしている。さすがに手間隙かけたか分らないが、べらぼうな時間がかかってるだけあって味には自信があるのだろうか。

ゴクツ。僕は一口飲んでみたが市販品と変わらぬ味に思えた。

「市販品ですからあ」

そうですか。

気を取り直し汲風さんはほんと軽く咳払いをし話しを続けた。

「まず、俺にもなぜあんな状況になったかは分らん。そこまで調べはついて無い。それにその後は知らん。警察に任せたからな。」

僕は素直に聞いていた。

「あ？なんか文句あんのか？なんで遊園地に居たか知りたいのか？んなもん、依頼されたからに決まってるだろ？俺の職業なんだと思ってるんだよ。依頼人は秘密だから。」

軽く口先を吊り上げ微笑。再度淡々としゃべる。僕は続きを待つ。「ミカンちゃんだっけ？妹さんに関しても、母親に関しても今はわからん。お前を助けてから後を追ってみたが見つからんよ。これが…」

「僕はどうして助かったんですか？あの状況で助かるとは思いませんが。」

汲風さんは少し笑い気味に話を続ける。

「それはあれだよ。あれ。俺がババァと駆けつけ、お前の父ちゃんの腕をバシッと蹴り上げ、握っている包丁をパーンと手放した隙に——って奴だ。お前はボタンと気絶してたしな。」 ジェスチャ

「混じりに擬音語のオンパレードだ。ま、言いたい事はよくわかった。」

「僕の気絶は信用するとして——嘘臭いですね。周りには誰もいませんでしたし。蹴り上げたらいくら僕でも気付くんじゃないですか？。どこに隠れてたんですか？」

「だーかーらー！嘘言っでどうすんだよ。隠れてたんじゃなく駆けつけたんだよ！」

「そうですね？紅茶、冷めちゃいますよおお？」

炒瑛菜さんが割って入ってきた。しかも流れに乗れてない状態で一体何に同意したんだろう？なんて疑問はこれっぽっちも思わなかった。

そう、それは——

炒瑛菜さんだから。

これで解決。

——終了。

僕は紅茶をグイッと一気に飲み干し、炒瑛菜さんにお代わりをたのんだ。これでしばらく戻ってこないだろう。

「——あ、ああ。それで嘘ですよね？」

そんな感じのやり取りを 数回繰り返した。

汲風さんがしゃべり、僕が聞き、炒瑛菜さんが邪魔をする。

それで分かった事、知った事をまとめてみた。

『父に襲われたのは事実、僕は気絶。汲風さんが駆けつけ？父を撃退。そのまま警察に。母と妹は行方不明。僕は病院へ。』

付け加えれば『炒瑛菜さんは邪魔をしているとは思えない。』
って事だった。

第2話の5

「それで僕に何をしろと言うのですか？」

僕は当然のように質問した。いくら襲われたからと言って、ここに来る理由にもならないし、話を聞かせる必要もない。今回の依頼に対して僕は監視の対象であつたかも不明だが、それなのにやつぱりここまで話す理由にはならない。

て事は――考えられる事は――

「ご名答。」

汲風さんは以前見たことのある、善くも悪くも見える微笑を返してきた。

「ちよつと手伝つて欲しいんだわ。一樣、お前の家族の事なんだからな。ま、無理にとはいわねーけどな。」

父は警察、母と妹は行方不明。僕に一人でどう生活しろと言うのか。話を聞かせたのはその為か……

お前は1人だ。家族もいなくて生きていけるのか？暮らしているのか？

「ま、もちろん手伝つてくれるなら、生活の保証ぐらいはしてやるぜ？お姉さん優しいからな。――で？どうするよ？」

やはり確信犯か……汲風さんは何故か嬉しそうにしている。

「僕が断ると思いますか？」

「いいや」

「でしょうね……」

僕はふうーて溜め息をつき、ワテンポ置いてから

「――わかりましたよ。手伝います。ちゃんと面倒見てくださいよね。」

「嫌だ」

「――は？」

「だから俺は面倒見るのは嫌だと言っている。めんどくせー事は好

きじゃねえんだよなー。俺の代わりに頼んどいたよ。」

さつきよりも悪意に満ちた顔だった。

ハメられた——のか？

「香ー！いるんだろー？」

すると炒瑛菜さんが入った反対の扉が開き一人の女の子が立っていた。

「はーい！汲風姉さん。呼びました？」

身長は僕ぐらい、黒髪でショートカット。ピンクのワンピースが良く似合っていた。歳も僕と同じぐらいだろうか？

「おう！香、今日もまた可愛い服着てんな。こいつが例の……あれだ。」

「ん？あ、ああああ！そいつですか！こんなひ弱そうなので平気ですかねえ？」心配になってきました。

本人を目の前に『ひ弱』と言える性格はどうにかしてるとしか思えない。しかも『例の』って何だ？ま、僕の事だろうと言うのは想像つくが。

「キミキミ。これから私と二人で過ごしてもらうわね。そういう約束になってるから。ぶつくさ言わずについてきなさいよ！貴方、弱そうだから心配だけど私がしっかり調教してあげるわ！」

「調教ですか……」

これからの生活を心配していたが余計に心配になった。てつきり汲風さんと過ごす事になるだろうと思っていたが、まさかこんな娘とだなんて……… いったい汲風さんは何を考えているのだろうか。

「ま、そういう事だ。香と一緒に生活をしてもらう。もちろん二人だ。理由は後で香に聞いてくれ。めんどい。文句あつか？」

「あっても聞いてくれませんよね？——ありませんよ。」

「よし！じゃ、俺は仕事が残ってるからそつちを片付けるとするか！」

「どこか行くんですか？」

「ああ、まだ仕事があつてな。人気者は忙しいんだよ。後の事は香

に任せな。」話し終わるとソファから立ち入口の方へ歩きだした。

全く心配なんてしてない雰囲気を見ると、この香という女の子を相当信用しているのだろうか。

汲風さんは扉の前まで歩いてクルッと半回転し僕の方にむかって、「香に変なことすんなよ。ま、それも無理だろうけどな」と言い残し姿は見えなくなった。

「いつてらっしゃーい！汲風姉さん！」

香は元気いっぱい、不自然に見送った。

第2話の6

「あーあつ。ふうー、汲風姉さんは居なくなつたようね。あの人といると気疲れしちゃうわ。」

香は大きく伸びをし、腰に手をかけながらしゃべっている。汲風さんが居なくなつた途端に態度が変わりすぎだろ。

「それにしてもあなたはほんっ…と弱そうね？私の仕事の邪魔しないでよね！」

「仕事って何をするんですか？僕には何もできませんよ？」

そう僕の問いにやや呆れ顔で、

「あんた何も聞いてないの？仕方ないわね、説明してあげる！ずばり、あなたの家族の監視よ。ま、汲風姉さんから引き継いだ仕事ね。所在がつかめない今は残りの母と妹を捜す事からね。」

なるほど、汲風さんから引き継いだ仕事ならわかった。つまりは生活は保証するから仕事を手伝えと言うことが。

「働かざるもの食うべからず……か」

依頼人は誰なのか？気になったが、誰だろうと僕は手伝わなくて生活がかかっている。ま、聞いたところで教えてくれるとは思わないけどね。

「何よ？文句ある？こつちだって仕事と割り切つて、あんた見たいのと一緒に住んだり仕事したりするんだから我慢しなさいよね！」

そりゃこつちの台詞だ。いくら生活がかかっているからとは言え。

僕の苦手な奴、第4位に入ろぞ。こいつは…

ちなみに1位は炒瑛菜さんです。ごめんなさい。嫌いじゃないですよ？

「何ボーツとしてるのよ！部屋に着いたら今後の事とか説明するからね！」

「はい！」

思わず威勢よく返事をしてしまった。

「じゃ、さつさと準備しなさい！時間は待つてくれないのよ！時は金なり。この給料泥棒が！」

別に金を貰っている訳ではないが、何かム力つく。反撃開始。

「……香さん。」

「何よ！」

「鼻毛でてるよ。」

「……………」

香は一瞬戸惑ったが次の瞬間には奇声を上げ、顔を真っ赤にし、少し涙目を見せながら部屋に戻ってしまった。

この際、鼻毛など出てようが出てまいが関係ない。本人は指摘されたことをたぶん信じる。あの性格なら尚更だろう。

「ざまあみろ。」

僕はまた部屋に1人取り残され、香が戻ってくるのを待った。

20分ぐらい待つてたら、まさにドンドンと言う擬音語がピツタりくらいの足取りで僕に向かってきた。ま、それくらいは予想済だ。「あなた！ちよつとふざけないでよ！私が鼻……そんな物出てるわけないでしょ！」

「見間違いだったのかな？ははっ、ごめんごめん」

「見間違いなんでするんじゃないわよ！ふざけるな！笑うな！しゃべるな！」

うわあ、本気で怒らせてしまったようだ。

「ほら！もう行くわよ！。無駄な時間を取らせないでちょうだい！別の部屋を用意してるから！何ボーっしてしてるの！本当に調教するわよ！」

仕方無しだが香の言うとおりにしたほうが無難だろう。僕は香と事務所を後にした。

「紅茶のお代わりおもちしましたああ！」

その声を聞いたのは二階の階段を降りるところだった。

ごめん炒瑛菜さん。今度飲みます。

僕は心の中でそう思い香と事務所を後にした。

それから

二年がたった――

第3話の1

二年間、香と一緒に住んで分かった事、いや住む前から予想はついていたかなりの我儘娘である。

僕の意見など完全無視。唯一話が通るときは、たまに遊びにくる汲風さんがいる時だけだ。

はつきりいつて一人のが楽だが、一人で生活するすべを持たない僕にはどうしようも無いと諦めている。手伝っている仕事はと言うと、自分で言うのも何だが——いや、誰も言ってくれないのであえて自分で言ってしまうが探偵としての能力は十分あると思う。才能ってやつだろうか。

母と妹——大体の事はつかめた。

と汲風さんが言っていた。僕は直接調べるとはさせてもらえず仕舞だった。理由はお前は弱いからだそうだ。

いつだったか「あなたは貧弱なんだから身を守るものを持たないと駄目だわ。いつか死ぬ——いや今から死になさい！」なんて香に言われナイフを一本貰った。

このナイフ。昔、汲風さんが使っていたらしく型が独特だった。

刃渡り十センチ程度の三日月状の型をしており、内側に折り畳める構造になっている。型が型だけに突いても——てか突けないので殺傷能力は無く、完全に斬る、裂くに特化したナイフだ。

とは言っても護身用に装備しているだけであって、今まで一度も使用した事はない。

この場合の使用は対人と言うだけでナイフ事態はお菓子の袋を開けたり、毛玉を取ったりと生活用品としてはかなりお世話になっている。それはそれで良い事なんだろうけど……

探偵としての仕事もそこそこなしてきた。

犬の散歩、迷い猫、浮気調査etc……

イメージしてた探偵の仕事とは違うものも多少あったが、僕に断

る権利はなく、強制労働を強いられた。——ま、楽だったけど。それらと平行して家族捜しもしているが、何も成果は無い。

と言うか、はっきり言って『二兎を追うものは何とやら』で僕は、僕自身が家族の事を探れる時間など余り無く、ほとんどは香にまかせっきりの現状である。

2年前までは色々会ったときの事なんかを考えてみたが、今は——このままの生活が続いてくれても——とも思えるようになった。

しかし、そうはせん！とばかりに扉を勢いよく開き——香が立っていた。

「見、見つけたわよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2147c/>

ユーカイロジック

2010年10月28日07時38分発行